

目指す学校像	SSH指定校として「自主・自律・創造」の校訓のもと、自ら育んだ高い「志」を実現し、次代を担い国際社会をリードする人材を育成する。
--------	--

重点目標	1 SSH指定校としての取組を起点に、全校生徒の「志」を育み、一人ひとりの第一志望の進路を実現する。 2 自ら課題を発見し、解決する主体的な学習態度を育てるとともに、授業の質を向上させ、社会のリーダーとなる確かな学力を身に付けさせる。 3 北高生としての品格を高め、健全な心身と豊かな人間性を育む。 4 地域の理数教育拠点校として活動すると同時に、グローバルな研究活動を展開して国際社会へ開かれた学校に発展させる。
------	--

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

学 校 自 己 評 価						学 校 関 係 者 評 価	
年 度 目 標				年 度 評 価			
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
1	<現状> ○今年度、SSH1期目最終年度となる。課題研究については、テーマ設定までに掛かる時間の短縮を図り、生徒に考えさせる指導を強化してきた。生徒の探究意欲が向上し、課題解決能力の向上に繋がっている。SSH関連行事は、生徒に浸透してきており、さくらサイエンスプランでは、相手国参加生徒の、本校取組についての評価が非常に高く、本校生徒にとっても充実したものとなってきている。 ○大学入試センター試験受験者が301名と学年の9割を超え、大学進学、一般受験の傾向が定着している。一方で5教科受験者は64名でセンター受験者の2割にとどまり、現役国公立大学合格者が25名と、前年と比べて微減した。背景には、志望校・学部・学科を考える際に挑戦するより確実に進路を決めたいという生徒・保護者の安全・安定志向がある。令和3年度からの新大学入試を迎え、受験をはじめとした進路に関する情報量において、教職員間に差が見られる。 <課題> ○SSH2期目の指定と、次期学習指導要領を踏まえた、本校の課題研究型授業の構築が大きな課題である。SSH推進部やカリキュラム委員会はもとより、全職員一丸となった対応が必要である。研究指定となる「さいたまSTEAMS教育」も積極的に推進する。 ○生徒が明確な高い「志」を抱き主体性を持って挑戦し学ぶ姿勢を育むと共に、それを実現できる環境整備に努める。全教職員が情報を共有できる環境を作り新入試の準備を行い、担任・副担任が生徒・保護者へ正確な情報提供を行えるように協力する。 ○総合型選抜・学校推薦型選抜定員増への対応を進める。 ○新型コロナウイルス感染症予防のため、教育活動の制限、進路行事等の見直し、実施方法変更を求められる環境下において、状況に合わせた対応が必要である。	SSH校としての取り組み	① SSH指定4年間の取り組みを客観的に評価し、SSH行事、数理探究などが生徒及び教員にどのような変容をもたらすことができたのかを評価していく。 ② SSH指定2期目に向けて学校全体のコンセンサスをとり、具体的な目標と方向性を整理し学校全体で共有できる環境を構築する。	① 過去4年間に行われてきた様々な評価を分析、さらに在校生、卒業生および教員などからSSHの取り組みについて調査を実施。得られた結果を詳細に分析し評価を行うことができたか。 ② 本校のSSHの取り組みは数理探究およびSS科学総合を中心に多くの教員から協力をいただくことができたか。積極的に意見を交換できる環境を実際に構築していくことができたか。	① 卒業生アンケートなどを実施し、本校のSSH活動が生徒にどのような影響を与えていたのかを分析し、第2期の方向性を確認することができた。 ② 「数理探究」「SS科学総合」などは定着してきたが、担当者間の意見交換を密に行うことが不十分である。	B	・SSH第2期の始動に向けて具体的な方策を早急に策定し実行していく。 ・「さいたまSTEAMS教育」の基盤を作るための具体的な方策および活動内容を策定し実行していく。
		高い「志」の育成と進路実現	① 生徒の「志」を高めるため、各学年・教科・進路指導部による組織的・計画的なキャリア教育を実施する。 ② 学年団と協力して、保護者に対しても進路情報を発信する。 ③ 卒業後の具体的な進路目標を早期に意識づけるため、進路希望調査及び個人面談を実施し、その内容を学年・進路指導部で共有して指導する。 ④ 家庭学習を習慣化し、効果的な時間管理意識を高めるため、タブレット等を活用して学習記録を付けるように指導する。 ⑤ Classi・スタディサプリ・模試復習サイトの活用を推進する。 ⑥ 補講(長期休業・後期)の積極的な参加を呼びかける。映像講座などの活用も促す。	① LHRや総合的な探究の時間等を利用して、学年に応じた進路行事を実施できたか。 ② 保護者に対して進路情報を提供できたか。 ③ 各学期1回の進路希望調査と、個人面談が実施できたか。生徒の進路動向を学年・進路で共有できたか。 ④ Classi等を使って学習の自己管理をした生徒が7割を超えたか。 ⑤ スタディサプリ視聴時間が前年度を超えたか。朝学習・宿題配信などでの活用ができたか。 ⑥ 年間で20講座以上の進学補習を開講できたか。	① 当初予定を一部変更しつつ、各学年に応じた進路行事を実施した。 ② 進路通信や学年通信を利用し、保護者に進路情報を提供した。また1・2年生は2学期の保護者会で進路講演を実施した。 ③ 学期毎に進路希望調査を実施し、学年・進路で共有できた。1学期には全クラスで、それ以降は必要に応じて、担任が生徒と面談を行った。 ④ Classiで学習記録をつけた生徒は、1・2年生で8割を超えたが、3年生は6割以下であった。 ⑤ 臨時休業中の宿題配信や、授業再開以降の朝学習・宿題配信などの効果で、スタディサプリの視聴時間や確認テストの完了数が増加した。 ⑥ 3年生向けを中心に、夏期14、後期14の28講座を開講した。	A	・臨時休業による学習の遅れへの危機感からか、Classiの学習動画やスタディサプリ、模試復習サイトなどの活用率がかなり向上した。一方で、通常授業が始まると生徒の動画視聴時間は減少した。今後は、より高い学習効果を得るための活用方策を練りたい。 ・生徒を「自立した学習者」として育てるために、家庭学習を習慣化し、効果的な時間管理意識を高め、学習記録の活用を推進する。現状では、指導が入らないとClassiの学習記録をつけない生徒が多く、自己管理の習慣づけにはまだ課題がある。
2	<現状> ○タブレット全員利用も4年目となり、生徒・教員とも日常のツールとしてタブレットを利活用できている。 ○授業改善を継続し、ICT機器を活用した主体的・対話的で深い学びの充実を進めてきた。教員研修や授業研究会により、更なる効果的な活用への模索が始まっている。 ・OSTは英語科を中心に効果的に実施してきている。 <課題> ○生徒全員タブレットをベースとした、授業支援サービスやテレビ会議システムを活用したICT教育の推進がさらに求められる。 ○ICT機器を用いたアクティブラーニングの実践を蓄積し、校内の横の連携を密にした授業改善が求められる。 ○1年生の「数理探究」における課題研究、2年生の理数科、SSC1.5クラスの合同展開の課題研究の内容の充実が求められる。 ○英語4技能向上を目指し、英語授業でOST実施、GTECスピーキングテスト継続、学校全体の連携が不可欠である。 ○入学者選抜において、昨年度の高倍率を保つべく募集事業に対する検証、改善、見直し等が必要となる。	生徒の学力向上に向けた全校で取り組む授業力の向上	① 1、2年生の「数理探究」において、生徒が主体的に学習課題を見つけて論理的に分析し、計画的な課題解決力を身につけさせる。 ② ICT機器をフル活用し、授業支援サービスやテレビ会議システムの導入・利活用を説教区的に進め、アクティブラーニングの実践を進め、新しい授業・指導法の方策をいち早く取り入れる。 ③ 授業アンケートを実施し、授業改善に役立てる。 ④ 英語4技能向上に対して学校全体での取り組みを推進する。 ⑤ 中学校・塾への訪問を積極的に行い、きめ細かな情報交換を行う。 ⑥ 充実した学校説明会・体験授業を行い、理解を深めてもらう。 ⑦ H Pやパンフレットの内容を改善し積極的に広報活動を行う。	① 数理探究の課題研究において、論理的に仮説を立て、それに基づいた研究計画が作成されたか。班内分担や共同作業が円滑に行われ、充実した発表ができたか。 ② 授業支援ソフトやテレビ会議システムを使い、新しい形の教育を提供できたか。 ③ アンケートが実施され、授業改善に役立てられたか。 ④ OST、GTECが組織的かつ協力的に進められたか。 ⑤ 具体的方策を実行できたか。 ⑥ 昨年度増加した学校説明会参加者数をそれぞれ維持または増加できたか。 ⑦ 最終倍率が普通科で1.3倍、理数科で2倍を維持または上昇したか。	① 数理探究の課題研究において、論理的に仮説を立て、それに基づいた研究計画が作成された。班内分担や共同作業が円滑に行われ、充実した発表ができた。 ② 特にテレビ会議アプリを使った授業を新たに提供することができた。そのノウハウを活かし、行事にも活用できた。 ③ 個々にアンケートを実施し、授業改善に役立てることができた。 ④ OST、GTECを組織的かつ協力的に進めることができた。 ⑤ H P等を通じ、中学校・塾に適切に情報を提供することができた。 ⑥ 人数や時間の制限を設けた説明会等開催だったが、予約開始から数分で定員に達するなど、高い関心を維持できた。 ⑦ 12月の希望調査では、普通科1.7倍、理数科1.8倍の倍率を保つことができた。	B	・次年度は全生徒がiPadを持つことになる。授業でのiPad活用や、学習支援ソフト、テレビ会議アプリなどを使ったICT教育、アクティブラーニングの推進がさらに求められる。 ・1年生の「数理探究」における課題研究、2年生の理数科、SSC1クラスの合同展開の課題研究の内容の充実が求められる。 ・英語4技能習得を目指し、OSTの実施方法、外部検定の在り方などを検討し、学校全体で連携する必要がある。 ・入学者選抜において、高倍率を維持すべく募集事業の検証、改善を進めていく。
3	<現状> ○風紀委員による登校指導や、自転車点検は毎学期定期的に実施し、生徒の安全意識高揚に努めている。しかしながら、自転車の乗車マナーに関して、一部の生徒に対して地域の方からご指摘を受けているが、登下校時を含め、生徒事故ゼロで推移している。 ○教育相談・特別支援委員会を毎学期定期的に実施し、教員、SC、SSWとの連携強化を図っている。 ○年度5回のケース会議を実施し、支援が必要な生徒に対して、組織的な対応ができている。 <課題> ○「自主」「自律」の校訓のもと多くの生徒は落ち着いた高校生活を送っている。生徒自ら学校生活の中で主体的に判断し行動できるような活動を促進する。 ○自転車通学、交通機関利用通学ともに多くの生徒は安全に登下校をしている。年々減少している事故件数がゼロになるよう職員、生徒へ喚起を促す。 ○教育相談の件数が、年々増加しているためカウンセラーと相談しやすい環境作りのため相談室を移転した。教育相談体制を維持、継続させることにより定着を図る。	安心、安全な高校生活	① 生徒自ら安心安全な高校生活が送れる環境作りを、風紀委員が中心となり「登下校マナーアップ運動」「駐輪マナーアップ」「挨拶運動」を行う。その活動を教職員がサポートする体制を整える。 ② 交通安全教室、携帯・インターネット安全教室を年度当初に実施し、年間を通じて生徒の意識向上を図る。	① 風紀委員、教職員による各活動が1年間を通して行われ、登下校、駐輪、挨拶のマナーアップが図れたか。 ② 交通安全教室を実施し、さらに事故件数が減少したか。携帯・インターネット安全教室を実施し、十分な指導ができたか。	① 2・3学期にマナーアップ活動を実施できた。風紀委員がマナーアップを投げかける生徒主体の活動も行うことができた。 ② 年度当初には自転車安全教室を実施することはできなかったが、大きな自転車事故はなかった。SNS安全教室実施の代わりに学年集会以指導を行った。	B	・年々マナーアップ改善がされてきているが、苦情もあるため、今後も継続的な主体的活動や話し合いが必要である。 ・SNSやタブレットを利用したトラブル防止や不正使用防止の重要性が増しているため、利用に関しては年間を通して指導していく必要がある。
		教育相談との連携	① 教育相談委員会を各学期定期的に実施し、スクールカウンセラー、個別サポート指導員、特別支援コーディネーター、教職員、保護者間で情報交換を密にする。	① 教育相談委員会を各学期実施し、関係者間で情報共有をすることができたか。	① 教育相談委員会を1・2学期に実施し、3学期も実施予定。関係者間で情報共有が図れた。支援が必要な生徒に対しての情報共有ができた。	B	・教育相談の件数が年々増加している。更に開かれた、利用しやすい環境作りのための工夫や方策を検討していく。
4	<現状> ○地域に根付いたアウトリーチ活動が実施できている。特に自由研究サポートプログラムは参加が600名を超え、昨年度比2割以上の増加となった。また、令和元年度新たに青少年宇宙科学館と連携した高校生ロケット教室を行い、好評を得た。 ○SS科学英語実践講座への参加生徒は昨年度より増加(約13%増)した。参加生徒からは、グローバルな視点を持つきっかけとなった、英語での表現力が向上したという声が寄せられ、満足度が向上している。 また、令和元年度は新たに芝浦工大、東京農工大、東洋大と連携が実現した。芝浦工大に49名、東京農工大に15名、東洋大に17名を派遣した。 ○修学旅行のサイエンス研修では、シンガポール大学との交流が実現し、生徒が世界的な視野を持つことの必要性を体感する貴重な機会となった。 <課題> ○アウトリーチプログラムの取組は、ほぼ完成形を迎えていると評価できる。前例踏襲するのではなく、ニーズに即した内容を取り入れていくことが課題である。 ○サイエンス研修をはじめとする海外交流プログラムは、年々充実が図られ、本校の特色ある教育活動の柱として定着している。取組内容を一步一步確実に前進させていくことが課題である。相互交流を深め、信頼関係の構築を一層進めていくことが必要である。 ○新型コロナウイルス感染症予防のため、様々な教育活動に制限が加えられている。本校生徒にどのような取り組みを提供することができるかを検討する。グローバルプログラムの補完的な活動として「エンパワーメントプログラム」も推進する。	SSH校としてのグローバルサイエンスリーダーの育成	① 生徒の想像力、探究力および発表能力を育成するために行われてきた数理探究、生徒のサイエンスに対する興味関心を高めることを目的に実施されてきたSSHサイエンスフィールドワークなどをどのように実施していくかを早急に考え、計画していく。	① 昨年まで行われてきた内容を早急に見直し、新しい環境に対応するための行事を計画実施することができたか。また、行われた行事などに対して生徒はどのような評価を行ったか。	① グローバルプログラムに関してはすべて中止となってしまったが、オンラインを通じて台湾の高校生とグローバルプログラムを展開することができた。SSHサイエンスフィールドワークは長寿フィールドワークのみ実施することができた。	C	・withコロナに対応したグローバルプログラムやSSHサイエンスフィールドワークの開発を行い、実行していく。
		SSH校としての地域の理数教育拠点校としての取り組み	① さいたま市内の理数教育拠点校として、行われてきた行事を、今年度は昨年度と同じ手法で行うことは不可能である。このような状況を踏まえ、新たな手法で理数教育拠点校としての役割をどのように担っていくかを早急に考え、計画していく。	① 地域の小学生および中学生に対してサイエンスに対する興味関心を高めるためのイベントなどを企画実行することができたか。	① 7月に実施が予定されていた「自由研究サポートプログラム」は過去の研究内容をH P上で配信した。ASEP jr.Hi.についてはフィールドワークおよび発表会は行わなかったが、化学、生物、数学、スポーツ、3Dプリンターなどのプログラムは実施することができた。天体観測会は実施することができた。エンパワーメントプログラムは、他校との合同開催により実施することができた。	B	・アウトリーチ活動を通じて、市内の小中学生にサイエンスに対する興味関心を高めると同時に「さいたまSTEAMS教育」の核となる生徒の育成を図る。

学校関係者評価
 実施日令和3年1月21日
 学校関係者からの意見・要望・評価等
 ・年度当初の臨時休業においても充実したICT環境を十分に活用し、授業の実施、宿題配信等による自主的な学習機会等を用意して生徒と学校のつながりを維持して今に続けた努力と工夫は高く評価できる。
 ・SSH指定5年目の最終年を迎え、学校内で取組が定着し、様々なサイエンスプログラムを全校生徒対象に実施し、普通科の生徒にもサイエンスに興味関心を示す生徒が増加していることは高く評価できる。
 ・SSH第2期目の指定、取組に向けて、卒業生アンケートの結果等も踏まえ、さらに充実した魅力あるプログラムを数多く実施してほしい。

・臨時休業となった後、オンライン授業が速やかに実施されたこと、テレビ会議や授業支援のシステムに関する教員側の研修等が、教員同士の連携・協力により実施され充実した授業ができたことは評価できる。
 ・タブレット活用の実績と経験をさらに広げ、課題研究や教育相談にも生かしていくような取組に期待したい。

・多くの生徒が部活動を通じ学校周辺の清掃活動に取り組んでもらい、毎年地元自治会で課題となる落ち葉対策の改善につながったことに感謝している。
 ・3学年の学年通信は学校生活や受験対策等について分かりやすく親しみある内容となっておりとても良かった。
 ・進路情報の提供をどのように伝えていくか、学校としての実績と経験を残して次に活用できるよう工夫して欲しい。